

生徒と教師の協働関係と意識の変容 — 中学生の生徒指導の実践過程において —

中 澤 美 乃

神奈川県相模原市立小山中学校

要 旨

本研究では、中学校の特別活動におけるミクロレベルでの「教師の指導法改善」とマクロレベルでの「カリキュラム編成の改善」を目的とした指導過程において、「生徒の変容」に丁寧に寄り添った「教師の関わり」について、質的研究と量的研究の方法を組み合わせる検討を行った。中学校の特別活動における集団参加意識をどのように高めていくのか、また教師の協働関係をどのように築いていくのか、を探った事例研究である。取り組みを通じて、リーダー生徒が中核となりリーダーシップを発揮することで得た充実感が一般生徒たちへも波及し、フォロワーとしての自己有用感や学校充実度を向上させ、総体としての集団の力の向上へとつながっていくことがうかがえた。そして、それは生徒の発達段階に合わせた、教師の適切な自律支援的指導態度により支えられていた。教育課程の工夫とともに、どのように教師集団として互いの経験知、暗黙知を共有し、協働していくのかということについては、今後の課題として残った。

キーワード：自己有用感 リーダーシップ 教師の勢力資源 学校充実度 自己肯定感

1 研究の背景と目的

本研究は、自校で生徒会活動を中心とする特別活動に携わる中で、3年間を見据えた意図的・計画的なリーダー育成や、自治的な集団作りの重要性を感じてきたことから始まる。その一方で、平成 25 年度の全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙からも「集団での活動に意欲はあるが、自分が集団で活動を引っ張ることには抵抗を感じる」生徒の実態があり、自己肯定感の低さや自信のなさについても課題を感じていた。自己肯定感とは、「自分は自分でよい」「自分にはできる」等の自分の価値や有能さについての感覚や感情を指すものと考えている¹⁾。石川（2015）は、従来型のリーダーとの対比から、現代のリーダーが失敗を繰り返しながらも何が正しいのかを模索し、創造していく人材であると示した。学校においても、トップダウンではなく、集団の合意形成をうまく図りながら、集団の成員を話し合い

や諸活動に参加させるファシリテーターとしての働きが求められている。ファシリテーターとは、中立な立場でチームのプロセスを管理し、チームワークを引き出し、その成果が最大となるよう、支援する人物。グループのメンバーを鼓舞し、誘導し、参加を促して、創造性や当事者意識、生産性を引き出す役割を果たすことが期待されている²⁾。また中学校学習指導要領・特別活動編（2009）では、「自分を集団で活かす力・自分が集団を生かしていく力・総体として集団が生きていく力」を育成していくことが求められており、子どもや時代の変化と共に、リーダーのあり方やそれを支える教師の関わりも変容していく。

そこで、自校の学校生活向上の取り組みを通して、①各学級の代表・専門委員会の学年代表からなる学年プログラム委員会（以下、学プロという）の実践から、教師の関わり（勢力資源）がどのように生徒の自己有用感や学校充実度に影響を与えるのか、ま

た、②集団活動を充実させるための、生徒同士の話し合いによる合意形成とそれを指導・助言し支える教師の関わり（勢力資源）との繋がりについて、追究を試みることにした。自己有用感とは、他者とのかわりの中で実感された「他者からの好意的な評価」やそうした他者評価をふまえた自己評価をさして用いる概念であり、「自分は役に立っている」など自分の存在を価値あるものと受け止められる感覚を指す用語として用いている³⁾。勢力資源とは、田中・鹿嶋（2014）による、「集団の中で、ある人物が影響力を持つとき、その人物のどのような特徴が影響力を持つのか、何があってその人物が集団に対して影響力を持っているのかを表した、影響力の源のこと。また、その勢力の源泉となる教師の資質。親近・受容、外見性、正当性、明朗性、罰などがある」を指すこととする。

2 研究仮説と研究方法

本研究においては、次のような研究仮説と研究方法を用いた。

(1) 研究仮説

- ①生活上の諸問題を解決し、中学校での集団活動を充実させる学プロの実践から、学級・学年リーダー生徒のリーダーシップが発揮され、充実感が育まれることで、一般生徒もフォロアーとしての自己有用感や学校充実度も向上させることができ、総体としての集団の力も向上させることができるか、否か。
- ②学プロの活動における、教師のリーダー育成に対する意識や求めるリーダー像が、勢力資源として大きく生徒に影響を与えるか、否か。

(2) 研究方法

- ①生徒への質問紙調査の統計解析や因子分析
- ②学プロの毎週の話し合い活動への参与観察とエピソード分析
- ③教師への質問紙調査の統計解析や因子分析

3 生徒への質問紙調査と統計解析

所属校の全生徒を対象に、平成27年7月と11月の2回、30項目からなる「学校生活アンケート」を4件法で実施し、学校充実度や学プロの意義、教師との関係性について分析により明らかにしていくこととした。

【調査対象】

所属校（S市立O中学校）の中学1年～中学3年の全生徒

【調査期間】

2015（平成27）年7月7日（火）～7月19日（金）の間と2015（平成27）年11月2日（火）～11月13日（木）

【調査目的】

教師・生徒の関わりの中で、リーダー生徒たちのリーダーシップや充実感がどのように育まれるのか、また一般生徒たちもフォロアーとしての自己有用感や学校充実度を向上させることができていくか、調査研究するため

【回答数】

所属校の中学1年生206名、中学2年生226名、中学3年生202名の計628名（7月調査）

所属校の中学1年生214名、中学2年生224名、中学3年生208名の計646名（11月調査）

【手続き】

学級ごとに集団実施するよう依頼した教示文と調査票を各学級担任に渡し、調査実施後、後日回収した。

【調査内容】

30項目からなる「学校生活アンケート」を4件法で実施し、学校充実度や学年プログラム委員会の意義、教師との関係性についてどのように捉えているか、分析することで明らかにする。

7月調査からは、①大多数の生徒には没頭できるものがある一方、自信のなさも垣間見えたり、②クラスの人に「必要とされる」「役に立っている」ことに相関がみられたり、③学年を経るごとに教師との関わりにおける意識が自立の方向へ変容することなどが特徴として見られた。

11月調査からは、①3年生が「個人として」よりも「集団として」やり遂げたことへ価値を見出すことや、②学校の中核を担う2年生の期待と不安が表れていたり、③7月調査に引き続き、学年を経るごとに教師から自立しようとする傾向が見られた。

生徒の自治的能力は、自己有用感や、教師の適切な自律支援的指導態度によって支えられている。自律支援的指導態度については、鹿嶋・田中(2013)が「教師が生徒の自律を促そうと心がけ、そのためのきっかけを与える、教師の言語および非言語によるはたらきかけ」としている。そして、自治的能力は中学校3年間を通して、発達段階により大きく変容するものであるといえる。

4 学プロへの参与観察とエピソード分析

所属校の各学年の学プロに所属する生徒、及び、その指導教員を対象に、平成27年5月から12月までの計9回、学プロの話し合いの様子についてVTR撮影・参与観察した後、エピソード分析を行い、教師の適切な介入や生徒のリーダー性の成長をみた。

【調査対象】

各学年プログラム委員会に所属する生徒、及び、その指導教員

【調査期間】平成27年5月から12月

【調査範囲】所属校

【参与観察日】

1年生は5/20～11/11の計9回分

2年生は5/20～11/4の計8回分

3年生は6/10～11/4の計3回分

【調査内容】

学年プログラム委員会の話し合いの様子について、VTR撮影・参与観察した後、エピソード分析を行う。

これらのエピソード記録をキーワードに注目して分析を試みた。その結果を整理すると次のようになる。担当教師の関わりを6つの「臨機応変な意図的介入場面」における教師の「指導性」とし、①めあてを確認する働き、②話し合いを整理し、論点のず

れを修正する働き、③その行為や場面における行動に対する具体的な称賛や価値づける働き、④課題に対する達成状況を確認し、課題を再度捉えなおす働き、⑤解決策を、具体的な方法を提示して生徒に促す働き、⑥活動をさらに深める働きとして分類する中で、教師の指導性を勢力資源としてみとり、生徒たちにどのような行動を求めているのか、求めるリーダーシップの在り方について検討する一助とした。

回を重ねるごとに、「子どもの自律を促す働きかけ（価値観育成機能）」としての働きかけが減少し、「子どもへ励ましや価値づけを行う働きかけ（有能観育成機能）」が増えてきていることが分かった。

表1 臨機応変な教師の介入における指導性

	①めあてを確認する働き	②話し合いを整理し、論点のずれを修正する働き	③その行為や場面における行動に対する、具体的な称賛や価値づける働き	④課題に対する達成状況を確認し、課題を再度捉え直す働き	⑤解決策を、具体的な方法を提示して生徒に促す働き	⑥活動をさらに深める働き
①5/20(水)	0	6	1	0	6	0
②6/3(水)	1	0	1	1	0	0
③④6/10(水)	0	4	1	2	7	0
⑤6/24(水)	0	0	1	0	2	0
⑥7/1(水)	0	0	0	3	2	0
⑦7/8(水)	0	0	1	2	5	0
⑧10/7(水)	1	0	3	3	3	1

5 教師への質問紙調査と統計解析

所属校の教師へ、平成27年7月と11月の2回、30項目からなる「リーダーシップ育成についての意識調査」を4件法で実施し、教師のリーダー観が勢力資源として生徒に与える影響を、分析によって明らかにすることとした。

【調査対象】所属校（相模原市立O中学校）の教師

【調査期間】

2015（平成27）年7月7日～19日と

2015（平成27）年11月2日～13日

【調査範囲】S市O中学校の教師

【回答数】教師29名

【手続き】

それぞれの教師へ依頼文と調査票を渡し、調査実

施後、後日回収した。

【調査内容】

30項目からなる「リーダーシップ育成についての意識調査」を4件法で実施、対象者全員に配布し、記入後、回収した。「リーダー生徒に求める力は何か」「学年プログラム委員会の意義をどのように捉えているか」「教師のリーダー観や勢力資源」に関する質問項目を設定した。

上記の質問した調査結果について7月と11月の調査時点での変化について整理すると次のようになる。また、教師が学年ごとに「リーダーに求める傾向」を挙げれば、表2のように整理することができる。

7月調査からは、学年ごとに教師がリーダー生徒に求めることが異なり、①1学年担当教師は「運営力・目標達成力」を、②2学年担当教師は「人間関係調整力」を、③3学年担当教師は「自覚と責任」を求めていることが分かった。また、学年プログラム担当教師は皆、共通に、「計画性・責任感・運営進行力・協働性・社会性」をリーダーに持ってもらいたいということが分かった。

11月調査からは、①学級内所属感、②パーソンポジティビティ、③自己有用感、④協働性、⑤社会性をリーダー生徒に持ってもらいたいことが伺える。

学年ごとに教師が生徒に求めるリーダー像が異なり、より一層コミュニケーション力を発揮して「人・モノ・コト」と関わる力が求められ、中学校3年間を見通して継続的に育成されていることがわかった。

表2 教師が感じる「リーダーに求める傾向」

	学年ごとの傾向
1年	・先を見通して計画を立てることができる、会議で司会を務めることができるなど、会議の運営スキル
2年	・自分の責任を果たすことや、学級に所属して一員であることに喜びを感じるなど、集団における自分の役割を自覚し、責任を持って行動できる力
3年	・困っている人に手を差し伸べたり、クラスの一員であることに喜びを感じる、クラスのリーダーを支えようとするなど、学級の雰囲気作りに努めることができる力

6 生徒や教師の意識構造

生徒や教師の質問紙調査を因子分析し、意識構造をみることにする。

(1) 生徒の意識構造

生徒の意識構造は、7月調査については6つの因子が(表3)、11月調査については5つの因子が抽出された(表4)。

① 7月調査から考えられる生徒の意識構造

7月調査において、生徒の意識構造は、第一因子が、学級内でリーダーとして、またクラスの一員として役割を果たそうとすることや、人の役に立とうとするような内容から成っているため「学級内自己有用感」と命名した。第二因子は、時に支援的で、時に価値づけながら、生徒との関係を築いていく教師の関わりから成っていたため、「教師の支援」と命名した。第三因子は、自分の決めたことをやり遂げたり、責任を果たせることに対する喜びの項目から成っていたため、「責任達成感」と命名した。第四因子は、毎日の生活に対する充実感や学級の一員であることに対する所属感を表していたことから、「自己存在感」と命名した。第五因子は目標に向かって努力を重ね、没頭していることから「没頭感」、第六因子は、人の意見に左右されたり自分に対する焦りを感じていることから「自他ギャップ感」と命名した。

また、7月調査の学年比較からは、教師による影響は、1年では「教師の支援」、2年では「学級内役割期待感」や「教師への信頼感」へと変容し、教師から自立しようとする意識構造がみられた。

表3 生徒質問紙による7月調査の因子分析の結果

	全学年	1年	2年	3年
第一因子	学級内自己有用感	学級内自己有用感	学級内自己有用感	責任達成自己有用感
第二因子	教師の支援	教師の支援	責任達成没頭感	教師の支援
第三因子	責任達成感	責任達成感	学級内役割期待感	自己充実没頭感
第四因子	自己存在感	自己存在感	自己充実感	学級結束愛着感
第五因子	没頭感	自他ギャップ感	教師への信頼感	幸福希求自他ギャップ感
第六因子	自他ギャップ感	没頭感	自他ギャップ感	自己肯定感

② 11月調査から考えられる生徒の意識構造

11月調査においては、学級内の一員として役割を感じ、責任を果たしたりする項目から成り、「学級内自己有用感」と命名した。第二因子は、教師が生徒を支え、励まし、価値づける働きから「教師の自律支援的態度」と命名した。第三因子は、個人の選択に対する責任感や達成感を大切にすることから「個人内価値づけ態度」と命名した。また、第四因子は、学級の一員として過ごせることへの楽しさや充実感を表すことから「学級内自己存在感」と命名した。第五因子は、今のままではいけないと焦ったり他者の意見に捉われやすいことから「理想の自分へ向上しようとする意欲」と命名した。

表4 生徒質問紙による11月調査の因子分析の結果

	全学年	1年	2年	3年
第一因子	学級内自己有用感	学級内自己有用感	学級内自己有用感	自己有用感に基づく自己実現力
第二因子	教師の自律支援態度	個人内価値づけ態度	教師の支援	教師の支援
第三因子	個人内価値づけ態度	教師の支援	学級内協働自己存在感	個人内価値づけ態度
第四因子	学級内自己存在感	学級内自己存在感	個人内価値づけ態度	自己充実感
第五因子	理想の自分へ向上しようとする意欲	自己ギャップ感	自己ギャップ感	自己ギャップ感

③ 7月調査と11月調査の意識構造の比較

7月調査と11月調査を比較して、第一因子・第二因子については大きくは変わらないが、第三因子についてみると、「将来の夢や目標を実現するために努力している」「価値のある生活をしていると思う」「うちこめることがある」という要因が新たに11月調査を経て加わってきていることから、個人の努力に対して、自分で自己評価を形成的に行っていることがうかがえる。1学期を終え、2学期には体育祭や文化祭・1年生においては宿泊体験、2年生においては職場体験など様々な活動を通して、短期的なスパン・長期的なスパンで物事に取り組む中で、思うような結果がすぐにでることもそうでないこともあるだろうが、結果に捉われるだけでなく、ある目標に対して、個人として、また集団の一員としてどのように向き合ってきたか、また、どのようにその取り組みの過程を自分なりに受け止めたかなどを、大切に評価していこうとする様子がうかがえる。

そして、第四因子は7月調査・11月調査共に、「自己存在感」によるところが大きいことが分かる。このように、生徒の学校充実度を考えるとき、学級内での役割遂行による自己有用感が第一条件として働き、教師の適切な自律支援的態度による指導が展開されることで、責任感・達成感・学級内自己存在感が養われ、努力を重ねつつ悩み葛藤する中で、理想の自分へと成長していく過程がうかがえる。集団の成長によって個が伸び、個の成長によって集団の質も高まるという相互作用を及ぼしあいつつ、生徒たちは一つひとつの物事に向き合う自分自身をまろごと価値づけながら、学校生活の中で充実感を感じているのである。

また、7月調査・11月調査の第一因子にのみ着目すると、1・2年次に協働により育まれた「学級内自己有用感」が、3年次7月には「責任達成自己有用感」、3年次11月には「自己有用感に基づく自己実現力」へとダイナミックな変容がみられた。

中学校3年間を通じて育まれる自己有用感、仲間と協働する過程や教師の適切な関わりを経て、自己存在感・自己肯定感とともに育まれ、自己決定・自己実現していくエネルギーとして変化していくことから、人格形成に影響を与えているといえよう。

(2) 教師の意識構造

教師の意識構造は、7月調査、11月調査ともに5つの因子が抽出された(表5)。

表5 教師の7月と11月の因子分析の比較

	7月	11月
第一因子	社会性	誠実に耳を傾け、責任を果たす力
第二因子	場づくり力	合意形成力
第三因子	計画性	物おじせず、計画性をもって取り組む力
第四因子	親和的に関わる力	親和力
第五因子	良さを認め合い、最大化する力	自己と他へのポジティブな思考

個人や集団の質の高まりに応じて、教師が生徒に求めるリーダーの質が異なる、と見い出すことができた。7月と11月の因子をそれぞれ比較すると、第一因子が大きく変容していることがうかがえる。

7月調査において求められるリーダーとしての意識は、分け隔てなく人と関わることができ、進行したりまとめたりできる「社会性」や「場づくり力」など、会議の運営力などの側面が大きかった。しかし、11月調査においては、「困っている人や他人の不満や希望に対して耳を傾け、責任を持って行動できる力」が第一因子として求められていた。多様性を知った上での、集団における「合意形成力」が第二因子となっており、調和しながら「物おじせず遂行していく力」が第三因子、時にユーモラスな一面ものぞかせることで集団の心をつかみ、場を作れる「親和力」が第四因子、どんなことがあっても「ポジティブな思考」をもち、くじけず挑戦してほしいというリーダーへの思いが第五因子となっており、教師のリーダーへ求める意識の変容がうかがえる。

7月調査においては、やるべきことを達成する力（役割達成力）が求められていたが、11月調査においては、個人の成長や集団の質の高まりもあって、個人の思いに寄り添いながら合意形成した物事に対し、果敢に実行する力が求められているといえよう。

リーダー生徒に対しては、役割としてのリーダー性の伸長も大切であるが、より一層周囲のメンバーと親和的に関わりをもてる、人間味あふれるリーダーとしての成長が、リーダーの特性として求められていることが分かった。

7 研究のまとめと課題

学プロの実践より、リーダー生徒が中核となりリーダーシップを発揮することで得た充実感が一般生徒たちへも波及し、フォロアーとしての自己有用感や学校充実度を向上させ、総体としての集団の力の向上へとつながっていくことがうかがえる。意見や考え方の違いをすり合わせながら、チームで協働的に活動していくことで、一般生徒に対しても、協働することの意義やより良い学校生活を皆で作りに上げていく核になっていると考えるからである。

また、中学校3年間を通して、発達段階や環境の変化によってもリーダーとして求められる振る舞いやあり方が異なっていた。1年生は自治活動の基礎

的なスキルを身に付ける段階、2年生は新たにリーダーのあり方を模索する段階、そして、3年生は自分たちの思いをしっかりと持ち発信する中で、仲間とより良い学級・学年を作っていこうとする発展的な段階としての過程である。

そして、3年次にはリーダー生徒たちが、リーダーとしての立場を越えて、仲間をリードしたり支えようとしていたりしていたことから、リーダー自身が自在に立場を行き来することで、結果として「人・モノ・コト」をつなぐファシリテーターとしての役割を果たしていたのではないかと考える。また、3年次には一般生徒も、「自己有用感に基づく自己実現力」を発揮できていたことから、リーダー生徒・一般生徒ともに、主体的に他者と関わり、互いに影響を及ぼし合う関係を築くことができ、総体として集団の力（自治力）が向上したといえるのではなかろうか。

そして、それは自然発生的にできるようになるのではなく、生徒の発達段階に合わせた、教師の適切な自律支援的指導態度により支えられている。

また、21世紀型能力の「実践力～社会参画力～」育成を見据えて学校教育の中でどのような価値を育んでいきたいのか、教育課程の工夫とともに、どのように教師集団として互いの経験知、暗黙知を共有し、協働していくのかということについても、課題が残る。学校教育を通してどのような力を生徒に身に付けさせたいか、各校の実態に基づき、学校の教育課程を再構成していく必要がある。

参考文献

- 石川一喜・小貫仁（2015）『教育ファシリテーターになろう』、弘文堂
- 国立教育政策研究所（2013）『平成24年度教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5』pp.26-30
- 田中輝美・鹿嶋真弓（2014）『中学生の自律を育てる学級づくり』、金子書房、120-127
- 鹿嶋真弓・田中輝美（2013）『中学生に対する教師による自立支援的指導態度尺度の作成と信頼性・妥当性の検討』、2、pp.36-45、学級経営心理学研究

注

- 1) 國分康孝 (2001) 『現代カウンセリング事典』, 金子書房, p.353
- 2) フラン・リース著、黒田由貴子＋P. Y. インターナショナル (訳) (2002) 『ファシリテーター型リーダーの時代』 プレジデント社
- 3) 滝充 (2004) 『ピアサポートではじめる学校づくり中学校編』, 金子書房, p.186

(付記)

本稿は日本教師教育学会 (2016,9) での口頭個人発表を基に作成した。

引用文献

- 鈴木高志・西村多久磨・村上達也・鹿嶋真弓 (2015) 『中学生と高校生に求められるリーダーシップの実態：Web 調査を用いた予備的検討』, 4, pp.1-9, 学級経営心理学研究
- 田中輝美・鹿嶋真弓 (2014) 『中学生の自律を育てる学級づくり』, 金子書房, pp.120-127

学校生活アンケート

【生徒用】

*このアンケートは、「あなたの学校生活についての意識」や「学年プログラム委員会の取り組みについて、どのように感じているか」を調査するために行うものです。学校の成績には一切関係ありません。また、担任の先生や友達に回答の内容が公開されることはありませんので安心して回答してください。

●あなたの所属について、当てはまるものに○をつけてください。

1年 ・ 2年 ・ 3年	男子 ・ 女子
--------------	---------

●あなたが今所属している委員会があれば、○をつけてください。

評議員会 ・ 生活委員会 ・ 環境委員会 ・ 保健委員会 ・ 図書学習委員会 ・ 福祉交流委員会 情報委員会 ・ 体育実行委員会 ・ 舞台実行委員会 ・ 学年プログラム委員会 ・ 部長会
--

●次の項目で、あなたに当てはまるものについて、
○をつけてください。

まったくそ
う思わない
あまりそう
思わない
すこしそう
思う
非常にそう
思う

1 私にはうちこめる(夢中になれる) ことがある	4	3	2	1
2 毎日の生活がおもしろくない	4	3	2	1
3 私の生活は充実感で満ちた楽しさがある	4	3	2	1
4 自分の生き方を考える時、人の意見に左右されやすい	4	3	2	1
5 私をわかってくれる人がいないと思う	4	3	2	1
6 私は困難に直面しても多少のことではへこたれない	4	3	2	1
7 私は毎日の生活の中でものをやり遂げる喜びがある	4	3	2	1
8 今の自分のままではいけないという焦りがある	4	3	2	1
9 私は価値のある生活をしていると思う	4	3	2	1
10 生きていく上で自分の決めたことに責任がもてる	4	3	2	1
11 自分の責任を果たすことに喜びを感じる	4	3	2	1
12 私は「人間は一人一人責任ある存在だ」と思う	4	3	2	1
13 私はクラスの人に必要とされている	4	3	2	1
14 私はクラスの人役に立っている	4	3	2	1
15 私はこのクラスの仲間の一員であることが嬉しい	4	3	2	1
16 私はクラスがどうしたらいいのか考えながら行動している	4	3	2	1
17 私も場面によってはクラスのリーダーになることがある	4	3	2	1
18 私はクラスのリーダーを支えようとしている	4	3	2	1
19 学級みんなで協力して何かをやり遂げうれしかったことがある	4	3	2	1
20 私はクラスの一員として責任を果たそうとしている	4	3	2	1
21 先生は私たちにどんな人になってほしいか話す	4	3	2	1
22 クラス全体で何かをするときにまとまりがある	4	3	2	1
23 私はクラスの中に自分の役割がある	4	3	2	1
24 先生は私たちにこれだけはしてほしくないということを話す	4	3	2	1

25	できなかったことができたとき先生はすかさず声をかけてくれる	4	3	2	1
26	私たちだけではどうすることもできないとき先生は助けてくれる	4	3	2	1
27	先生は私の話を聞いてくれる	4	3	2	1
28	自分の発言や行動に自信がある	4	3	2	1
29	将来の夢や目標を実現するために努力している	4	3	2	1
30	学級の友達との間で話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思う	4	3	2	1

リーダーシップ育成についての意識調査

【教職員用】

＊このアンケートは、「教職員の皆様が、リーダーシップについてどのように捉えているのか」「どのような生徒に育ってもらいたいのか」「学年プログラム委員会の取り組みをどのように捉えているか」を調査するために行うものです。

●現在のあなたの所属について、当てはまるものに○をつけてください。

1年 ・ 2年 ・ 3年 ・ 支援級 ・ その他	男性 ・ 女性	担任 ・ 副担任
学年プログラム委員会を、 担当している ・ 担当していない		

●『中学生のリーダーシップの資質及びスキル』について、重要だと思うあなたの考えに○をつけてください。

まったく
そう思わない
どちらかといえば
思わない
どちらかといえば
そう思う
とてもそう思う

①先を見通して計画を立てることができる	4	3	2	1
②話し合いの時にみんなの意見を1つにまとめることができる	4	3	2	1
③困ったときに友人らに気軽に相談することができる	4	3	2	1
④困っている人を見ると援助してあげたくなる	4	3	2	1
⑤嫌なことがあっても、いつまでもくよくよと考えない	4	3	2	1
⑥自分のことが好きである	4	3	2	1
⑦手に入れた情報を使って、より価値の高いものを生み出せる	4	3	2	1
⑧目上の人の前では礼儀正しく振る舞うことができる	4	3	2	1
⑨自分の発言や行動に責任を持つことができる	4	3	2	1
⑩他人の抱いている不満や希望について話を聞くことができる	4	3	2	1
⑪会議や話し合いの議長や司会を務めることができる	4	3	2	1
⑫人の良いところを見つけることができる	4	3	2	1
⑬カリスマ性がある	4	3	2	1
⑭集団に反抗したり暴力的な振る舞いをするメンバーともうまくつきあえる	4	3	2	1

⑮ユーモアや楽しいことを言って場を盛り上げることができる	4	3	2	1
------------------------------	---	---	---	---

- 学校生活において、あなたが指導者として、「こういう生徒に育ってほしい（このように生徒に感じてもらいたい）」と思い、意識して指導していることについて、あてはまるあなたの考えに○をつけてください。

	まったくそう 思わない	どちらかといえ ば	どちらかといえ ば	そう 思う	とても そう 思う
①今の自分のままではいけないという焦りがある	4	3	2	1	
②私にはうちこめる(夢中になれる) ことがある	4	3	2	1	
③私の生活は充実感で満ちた楽しさがある	4	3	2	1	
④自分の責任を果たすことに喜びを感じる	4	3	2	1	
⑤私はこのクラスの仲間の一員であることが嬉しい	4	3	2	1	
⑥私は価値のある生活をしていると思う	4	3	2	1	
⑦生きていく上で自分の決めたことに責任がもてる	4	3	2	1	
⑧私はクラスの人役に立っている	4	3	2	1	
⑨私はクラスのリーダーを支えようとしている	4	3	2	1	
⑩私はクラスがどうしたらいいのか考えながら行動している	4	3	2	1	
⑪私はクラスの人に必要とされている	4	3	2	1	
⑫私はクラスの一員として責任を果たそうとしている	4	3	2	1	
⑬将来の夢や目標を実現するために努力している	4	3	2	1	
⑭自分の発言や行動に自信がある	4	3	2	1	
⑮クラス全体で何かをするときにまとまりがある	4	3	2	1	

- 1 左ページの①～⑮以外で、あなたは、『中高生にはどのようなリーダーシップの資質やスキルが求められる』と思いますか。下の□に記入してください。

- 2 各学年プログラム委員会の活動について、日頃どのように感じていますか。

アンケートにご協力ありがとうございました。

調査責任者：中澤 美乃（帝京大学教職大学院）